

イラクで開催される見本市

ドバイ事務所 中尾 純二
企画課事業推進班 中島 紳行

にぎわいを取り戻す バグダッド国際見本市

イラク最大の見本市、バグダッド国際見本市。湾岸戦争前年の1989年には64カ国が参加し、国内外から80万人が訪れた。会期中には海外から約40人の大臣・次官級がイラクを訪問、日本企業25社も出展した。

その後、イラク戦争により中断していたが、7年ぶりの再開となった2009年の第36回見本市には外国企業264社（32カ国）を含む、計435社が参加。11年11月1日から10日まで開催された直近の第38回バグダッド国際見本市には約750社が出展、うち443社が外国企業と報じられた。ようやくかつてのにぎわいを取り戻しつつあるようだ。海外勢ではフランス、トルコ、米国、ドイツ、イラン、ヨルダン、チェコ、インド、シリアなどが各国の商品を扱う代理店を集め、国単位で出展。日本は政府ブースを設置し、民間企業9社などの広報展示を行うとともに、会期中に官民合同の視察ミッションを派遣した。

09年から参加しているフランスのブースには、重電のアルストム、自動車のプジョー、石油のトータルなど約40社の企業・機関が出展。ドイツ・ブースには化学のBASF、建設資材のクナウフ、建機・家電のリープヘルなど

33社が出展した。3日のドイツ・デーにはドイツ副首相兼経済相が出席して注目を集めた。過去最大規模の88社が出展した米国は、ヨルダンなどから資材を取り寄せ、ブースを色鮮やかに装飾、「あなたもアメリカ大統領になれる」コーナーを設置するなど趣向を凝らした。

中国や韓国は国単位での出展はなかったが、中国のチェリーや韓国の現代自動車などは屋外スペースに自動車を展示し、存在感をアピールした。韓国のLGは家電、携帯電話、ゲームなどを展示し、3Dテレビの体験コーナーには人だかりができるほどのにぎわいだった。

イラク最大の総合見本市だけあって、展示された商品は多岐にわたった。復興需要に沸くイラクの中で機械関連部品が多数展示された。また、庶民の購買意欲をそそる食料品、家電、電子製品、車、ゲームなど消費財が多数出展された。見本市に出展していたキャノンの現地代理店は、「カメラは台湾で作られたものだが、売れ行きは非常に良い」と語ったが、消費財の売れ行きは好調だ。

一方で、参加国が多い割に外国人の姿は少なかった。各国とも代理店をベースに商売を進めているためだろう。展示会場は空港から離れた「レッドゾーン」にあり、

会場の入り口では厳重なボディチェック、荷物チェックが行われていた。入り口すぐの駐車場では戦車が待機するなど、治安上の不安が払拭し切れていないことを思い起こさせる。とはいえ、開会式には首相が出席し、多くの大臣が視察、さらにイラクの主要国営・民間企業が出展する点でも注目度が高い見本市だろう。治安面の不安など、必ずしもビジネス環境は良くないが、欧米企業は大規模に出展した。戦後復興だけでなくさらに将来的な経済発展を見据えてビジネス機会を捉えようとする意気込みが感じられた。

クルド地域のエルビルで 見本市相次ぐ

バグダッドではいまだに治安面での不安がぬぐい切れないが、クルド地域は治安が比較的安定し、商業活動が活発化している。同地域の首都エルビル市では「エルビル国際見本市」や「イラク・アグロフード」などの国際展示会の開催が相次いだ。

11年10月24～27日に開催された「第7回エルビル国際見本市」には、22カ国850社が出展、来場者は7万3,000人に上った。内訳はイラク国内からの来場者が8割強（うちクルド地域50%、同地域以外32%）、残る2割が外国で、トルコ、レバノン、ヨルダン、シリアの順だ。24日の開会式には、バラザーニ・クルド地域政府大統領が出席した。

国単位のブースは、イラクのほか、オーストリア、ベルギー、チェコ、フランス、ドイツ、英国、イ

コラム

ラン、ヨルダン、エジプト、トルコ、中国が設置した。各国の政府関係者は出展の理由として、「安全なエルビルからイラク・ビジネスの開始を検討」「エルビルを拠点にイラク中央・南部のビジネスパーソンとのコンタクトを広げていきたい」「クルド地域は、言語などの面からもイラク市場とは異なる市場ということを念頭にビジネスを展開することが必要」などを挙げた。

国単位のブースとは別に、大規模な展示を展開したのは、韓国の家電メーカーの代理店だ。LGの代理店が設けたゲームを楽しめる3Dテレビの体験コーナーは盛況だった。サムスン電子の代理店は、スマートフォン、ロボット掃除機を展示したほか、K-POPグループ「少女時代」の映像を液晶テレビで流し、注目を集めた。サムスン電子のエルビル駐在員（韓国人）は出展の理由を、「エルビルでは当社の携帯電話の認知度は高いが、他の製品の認知度を上げるため」と説明した。家電では、中

国の美的グループと康佳グループ、トルコのアーチェリッキとベコの代理店が大規模なブースを構えた。日本企業の出展はなく、日本製品では、現地有力ビジネスグループであるジハングループが、トヨタ自動車のカローラ、日立建機や川崎重工業などの建設機械を展示した。

活発な商談が展開された一方で、家族連れや若い女性の姿も目立った。人気だったのは、食品、洗剤、化粧品などの日用品、香水、アクセサリーなどのファッション関連商品、カーテンといったインテリア雑貨などだ。レバノン企業が展示した狩猟用の銃は、娯楽を求める来場者から熱い視線が送られていた。

同じエルビルで、11年11月21～24日に開催されたのは食品専門見本市「第4回イラク・アグロフード2011」。同展示会には17カ国350社が参加した。出展の中心は、中東の近隣諸国だ。トルコ系企業が最多で100社を超え、イラクの40社強、イランの30社弱と、中東3カ国で全出展者の半分を占めた。展示品は、トルコが水産物、菓子類、ジャムなど加工食品、乾燥果物・ナッツ類、豆類などの穀類、鶏（肉）など。イラク企

業は麦、コメなどの穀類、ザクロなど果物類、ハチミツ、酪農製品、紅茶など。イランがアイスクリーム、菓子類、ジャムなどの加工食品、穀類、酪農製品、養鶏用の飼料や器具などを展示した。スリランカは、消費者に好まれている紅茶に的を絞っていた。先進国の出展は、ドイツやイタリア企業が中心で、品目は食品加工機械や包装機械類、オランダは酪農技術やチーズ製造機械の展示が主体だった。

クルド自治区があるイラク北部は、かつてはイラクの穀倉地帯と呼ばれた土地だ。水資源を生かし麦類、野菜類、果物類などの畑作営農や牧畜・酪農・養鶏などの畜産営農が展開されている。そんな事情を反映し、同展示会には食品加工技術、養鶏の技術支援、大型農業機械、発電施設など、国内企業の営農や食品加工の改善に資する技術面での展示も見られた。

イラク大手企業はトルコ系やイラン系企業など多くの外国ブランドの代理店を複数務めており、今回の展示会でもこれら有力代理店の活動が目立った。

クルド地域の人口は約500万人にすぎないが、その中心となるエルビルは治安も良く、急速に豊かさを増している印象を受ける。この市場を狙ったクウェート資本やフランス資本などスーパーマーケットの出店が近年進む。「安全」という大きな魅力が、多くの内外企業をエルビルの国際見本市に引き付けたようだ。



（まとめ：中東アフリカ課）



イラクで最大のバグダッド見本市